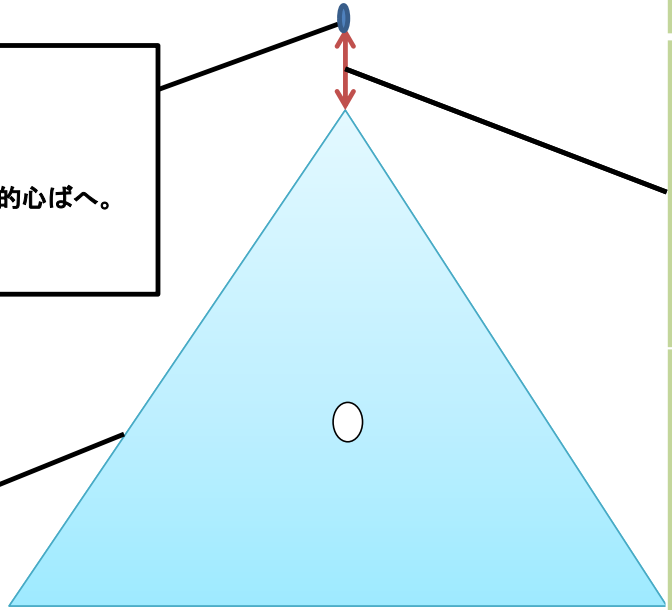
小林秀雄著『本居宣長』:四十九章主題《[古傳説を創り,育て,信じて來た,古人の心ばへを熟知しなければ,わが國の歴史を解く事は出來ぬ.神々が,傳統的心ばへのうちには,現に生きてゐる]は,[其國のたましひが,國の臭氣也]とする,秋成の考へとは,全く逆であつた》その「關係論」的纏め。

⑨#言靈(ことだま)⇒からの關係:[その(計り知りえぬ威力の) #性質情状(#あるかたち)]を見究めようとした㉔の努力(とは:#神 への #古言 による #古意/#體言命名)に,㉒は注目してゐたのである.これは,⑨の働き(言靈⇒#轉義⇒#合體)を待たなければ出來ない事であつた⇒㉒宣長㉔大人達(上古の人々).
⑨#言靈⑩#空や山や海⑪彼方⑫#神々⑬#驚くべき心⇒からの關係:(前項⇒).そして,⑨の働きも亦,⑩の,遙か見知らぬ⑪から,㉕の許にやつて來たと考へる他はないのであつた.⑫は,㉕を信じ,その⑬を,㉕に通はせ,君達の,#信ずる所を語れ,といふ様子をみせたであらう⇒㉕彼等(上古の人々).
②#自然⑫#神々⑭#自然全體⇒からの關係:(前項⇒)[君達の信ずる所を語れ]といふ⑫の聲が,㉕に聞えて來たといふ事は,言つてみれば,⑭の内に,㉓は居るのだし,㉓全體の中に②が在る,これほど確かな事はないと感じて生きて行く,その味ひだつたであらう⇒㉓#自分等㉕#彼等(上古の人々).

①#古傳説②#古人の心ばへ③#わが國の歴史④#神々⑤#傳統的心ばへ⇒からの關係:[①を創り,育て,信じて來た②〔とは:神への古言(いにしへごと)による古意(いにしへごころ)＝體言命名〕を #熟知しなければ,③を #解く事は出來ぬ, ④が,⑤のうちには,現に生きてゐる事は,⑮の見るところである]は,[其國のたましひが,國の臭氣也]とする⑯の考へとは,#全く逆であつた⇒⑭#宣長⑮衆目⑯#秋成。
①#古傳説⑥#今⑦#人々の表情⑧#國語 の力⑨#運命⇒からの關係:⑥もなほ①の流れに浸つた⑦は,#故意に眼を閉じなければ,⑰にも #見えてゐる.それ〔とは:①の流れに浸つた⑦〕は,⑱が⑧に捕らへられてゐるのと同じやうに,⑱の⑨と呼ぶべきものである.と⑭は言ふ⇒⑭#宣長⑰#誰⑱#私達.
⑨#運命⑩#姿⑪#意味⑫#眞⑬#天⇒からの關係:(前項⇒).⑰のものでもない自分の⑨の #特殊性の完璧な⑩,それ〔とは:特殊性の完璧な⑩〕自身で充實した⑪を見極めて,是を⑫として信ずる事は,⑲の⑨は⑬與のものといふ考へに向ひ,是を支へてゐなければ,不可能ではないか.と⑭⇒⑭#宣長⑰誰⑲#己

(物:場 C')・・・
⑨#言靈(ことだま)。
⑨#言靈⑩#空や山や海⑪彼方⑫#神々⑬#驚くべき心。
②#自然⑫#神々⑭#自然全體。
①#古傳説②#古人の心ばへ③#わが國の歴史④#神々⑤#傳統的心ばへ。
①#古傳説⑥#今⑦#人々の表情⑧#國語 の力⑨#運命。
⑨#運命⑩#姿⑪#意味⑫#眞⑬#天。



(△枠):㉒宣長㉔大人達(上古の人々)/㉕彼等(上古の人々)./㉓#自分等㉕#彼等(上古の人々)./⑭#宣長⑮衆目⑯#秋成/⑭#宣長⑰#誰⑱#私達/⑭#宣長⑰誰⑲#己

からの關係(D1の至大化)

＊「[その(計り知りえぬ威力の) #性質情状(#あるかたち)]を見究めようとした㉔の努力(とは:#神 への #古言 による #古意/#體言命名)に,㉒は注目してゐたのである.これは,⑨の働き(言靈⇒#轉義⇒#合體)を待たなければ出來ない事であつた」。
＊「:(前項⇒).そして,⑨の働きも亦,⑩の,遙か見知らぬ⑪から,㉕の許にやつて來たと考へる他はないのであつた.⑫は,㉕を信じ,その⑬を,㉕に通はせ,君達の,#信ずる所を語れ,といふ様子をみせたであらう」。
＊「:(前項⇒)[君達の信ずる所を語れ]といふ⑫の聲が,㉕に聞えて來たといふ事は,言つてみれば,⑭の内に,㉓は居るのだし,㉓全體の中に②が在る,これほど確かな事はないと感じて生きて行く,その味ひだつたであらう」。

＊「:[①を創り,育て,信じて來た②〔とは:神への古言(いにしへごと)による古意(いにしへごころ)＝體言命名〕を #熟知しなければ,③を #解く事は出來ぬ, ④が,⑤のうちには,現に生きてゐる事は,⑮の見るところである]は,[其國のたましひが,國の臭氣也]とする⑯の考へとは,#全く逆であつた」。
＊「⑥もなほ①の流れに浸つた⑦は,#故意に眼を閉じなければ,⑰にも #見えてゐる.それ〔とは:①の流れに浸つた⑦〕は,⑱が⑧に捕らへられてゐるのと同じやうに,⑱の⑨と呼ぶべきものである.と⑭は言ふ」。
＊「:(前項⇒).⑰のものでもない自分の⑨の #特殊性の完璧な⑩,それ〔とは:特殊性の完璧な⑩〕自身で充實した⑪を見極めて,是を⑫として信ずる事は,⑲の⑨は⑬與のものといふ考へに向ひ,是を支へてゐなければ,不可能ではないか.と⑭」。